

辺境地莊園の名体制の

性格に関する一考察

田中 晋

農民の没落を招いた史料としてしばしば引用されるのが「続日本紀」の慶雲三年（七〇六）三月の条にある次の記事である。

「王公諸臣多占山沢、不事耕種、
競懷貪婪、空妨地利、若有百姓採柴草者、
仍奪其器、令大辛苦、云々……」

皇室の私的大土地所有である官田や公管田等もほぼ同様の性格を持ち、官田は大化以前の屯倉、田莊的構造を繼承し奴隸制的直接經營を根幹としていた。かような構造をもつ八世紀の初期莊園は、その奴隸制的直接經營という性格の故に、畿内及びその周辺地域にしか展開し得ず、それも間もなく衰退の方向を辿った。九世紀に入ると、一方では院宮王臣家の大土地所有制限令が反復され乍らも、他方では莊園や官田等の私的大土地所有が従来とはその内部構造を転換し一つ全国的規模で展開してくる。即ち律令体制の解体、農村に於ける共同体的諸關係の分解は八世紀を通じて著しく促進され没落農民を家長制

我國の古代末期の社会は律令制的国家的土地所有として代つて其圓制的私的大土地所有が全国的規模で展開しそれが摂關政治院政、平氏政權等古代末期の中央權力の經濟的基盤を構成した時代であつた。律令制的国家的土地所有性は八世紀に入るとはやくもそれが内包していた矛盾、特に過重な徭役労働の收取と班田農民の私的經營との矛盾によつて、彼等の分解と流亡を促進し養老七年（七二二）の「三世一身の法」、天平一五年（七四三）の「班田永世私有令」を契子として私的大土地所有制展開への道を開くに至つた。これが八世紀にみられる初期莊園形成の端緒である。初期莊園は律令によつても「公私利を共にす」と定められていた未墾地、山野入会地の囲込みを強行し農村に於ける共同体的諸關係の破壊、農民層の分解を促進し一つ、發生してくる浮浪民労働力を吸収させ、班田農民の徭役、賃租労働力及び直接的に集積した労働奴隸等によつて莊園所有者である中央貴族や大社寺が直接經營を行うものであつた。貴族の未墾地囲込みが

的奴隷制体制に包含していったのが伊賀国の藤原実遠等の私営田領主であつたが私営田経営はその内部の隷屬的な農民の小経営を完全に否定するものでなくそれを前提とするものであつたから生産力の發展に伴つてそれらの小経営の階層分化を許容する可能性を残している。事実又その内部には小規模な家父長制的奴隷制家族が發展するのである。九、十世紀を通じて私営田領主の支配領域内部にも「百姓治田」が形成され治田主が新たな力を以て私営田領主との対抗關係を現わし始めてくる。この傾向は私営田領主が農民の労働力を自由に駆使して営田を行ふ事を困難にした。又私営田領主の成長は初期莊園領主にとつても固衛にとつてもそれが自己の敵対物となる可能性をもつていたので彼等はこれに對する上からの圧迫を強めた。その結果私営田領主は従来の直営方式を縮小放棄せざるを得なくなり没落するか或は存続し得た場合でも反別一斗乃至四、五斗の「加地子」得分権だけを確保する加地子領主に転換せざるを得なくなつた。こうした私営田経営、従つて又これと性格を同じくする諸種の奴隷制的直営方式を消滅させていった直接の力となつたのが治田主でありしは「田者」と呼ばれる農村の小奴隷主的地主であつたのである。十世紀の農村に於けるこの様な治田主田埔の發生は私営田経営の衰退を早め更

に律令体制の根本的な収支体制を大きく転換せしむ様な変化をもたらしした。承平二年(九三三)丹波國多紀郡國衙領では「當郷調額、為例付辨々堪百姓等名」(承平二年九月二日丹波國牒)という事が國衙の側から認められている。律令体制に於ては庸調雜徭の類はすべて人身別に賦課する規定であつたがこの様な性格をもつた調額が人身別にではなく「堪百姓の名に付して」賦課する方式に転換されているのである。「堪百姓」とは諸賦課に堪え得る有力農民であり名とは云うまでもなく耕地を指す。か様な傾向は莊園にもみられる。即ち十二世紀になると東大寺大和國御油免田では租庸調雜徭の転化形態たる所当地子雜物がすべて「町別」地積を單位として賦課されている。この事實は班田農民の分解と逃亡、或は戸籍計帳の混亂等によつて従前の如き人身別賦課が不可能になり他方農村内部に堪百姓といわれる有力な地主的農民層が成長して来た結果彼等の私的占有地を名として國衙側が法的にも認めると共にこれを諸賦課の單位として編成し始めた事、更にこの傾向が莊園に於ても進行しつつあつた事を示している。この様にして治田を集積し口分田を私有化した小地主的農民が「堪百姓」即ち課役賦課の対象として把握される半面その私的土地所有を名として承認される様になると彼等は更に國衙の追索を逃れる為にその

所有地を形式的に権門に占進すると称して中央有力貴族に寄託する行為を開始した。これは田堵層による土地寄進ばかりでなく地方で寄進を受けた在地領主が更にこれを中央貴族に寄進し或は中央貴族層内部でもより有力な権勢者を求めて二重三重の寄進關係を作り出した。この様な性格の莊園を初期莊園と區別している。この様に成立した莊園体制もその内部構造や階級構成の成立を規制する自然的・人文的諸条件によつて様々の地域的偏差をもつてゐるが大局的にみると畿内を中心とする先進地帯と關東九州等の後進地帯とに分れる。先進地帯に於ては一般的に前述して来た様な莊園成立形式となるのに対して後進地帯に於ては初期莊園の展開がみられず後になつて行われた在地領主層による中央貴族や大社寺への寄進によつて成立した莊園が多い。この様な地域的偏差は單に地域的差異として構造上の問題に止らず奴隸制の解体和封建的土地所有形成の政治過程に大きな役割と意義とを持つてゐる。特に武家政権の成立の翌年から莊園体制を考察する場合に後進地帯である辺境地莊園の意義は非常に重要である。そこで辺境地莊園の名称の性格についてメスを加えてみたいと思う。

畿内莊園と比較して辺境地莊園の特徴の第一は規模の問題である。即ち古代社会の共同体的諸關係の解体の上

に展開する農村に於ける家父長制的奴隸制の規模が畿内に比べてはるかに大きく所謂「大名田堵」とよばれる大規模な名主層が形成された事である。例えば大業院領大和国池田莊の場合三十六町二百八十歩の中、佃(直營田)倉敷地、免田、給田等を除いた残部が有反名、眞垣名等十一名に分けられてゐるが各名の面積は田畑合せてほぼ二町前後であつて著しいへたたりをもつてゐない均等名である。これに対し薩摩國の建久國田帳に示されてゐる様に成枝名八六丁、光富名四九丁、時吉名六九丁、若松名五十二丁等の様に数十町歩を有し時には数百町歩に達する時もある。この様に畿内の名が小規模で均等名であつたのに対して辺境のそれは一般に数十町歩乃至数百町歩の田地が一個の名と呼ばれしかも一円的に集合してゐるのが普通であつた。これらの辺境の名に於ては成枝名主が郡司忠良時吉名主が在片反道、若松名主が在片裡明であつた様にその所有者は名主がいずれも畿内の田堵名主的な階層と異なる有力な領主的階層のものであつた。ここにみられる郡司とか在片は恐らく中央より下向土着したものとみるより在地の土豪で郡司、在片は國衙の権力機構を彼等の集團の私的機構に組み替えていつたものなのである。う、か様な大規模な名の成立の問題について畿内の場合の様にも共同体的諸關係の解体に際して中央貴族、社寺等

の権力が班田農民の分解の中から成長してくる田堵名主層の大規模な発展を抑制する力に及ぼし得なかつた事と班田農民の分解によって作り出される奴婢、寄口的な労働力が畿内では中央貴族社寺等の荘園領主に吸収され易かつたが辺境ではかかる事はなくそれらのものは在地の有力者に吸収された事等の理由によって大規模な名が形成され易かつたと松本新八郎氏や永原慶二氏は説いて居られる。又辺境に於ける農業経営の粗放性は名の太規模性を与える一つの理由ともなつていた。

ではかかる大規模な名は如何なる構造をもつていたか。畿内の名が単なる耕地片へ主として田一の聚合としてその内部構造が比較的単純であるのに対して辺境のそれは普遍的現象としてその内部に耕地のみならず在家^{イヘ}・菑^{イヘ}の農民（名主に隷属する農民で前述の班田農民の分解によって生じた在地の有力者）名主に吸収されて出来た隷属農民と未墾地山林原野をも包含しそれらの統一体として複雑な構造をもつていたという特質がある。これを典型的に考えると（一）田地（二）畠地（三）菑地（四）未墾地の構成要素より成り立っている。中心となる田地は原則として名主の門田、給田等の完全な私有地と荘園領主又は国衙の賦課の対象となる公田との二つの性格の異なる部分から成り立っている。

これらの田地に対する收取関係は門田等の場合これが完全な名主の私有地で被注からも除外される性質のものであり全生産物は名主の手に歸する事は疑いない。公田の場合は全生産物のすべてが名主の手になる前者とは異なり荘園領主と古代的在地領主と名主層の三者から名主の下に隷属する在家農民は收取されるのである。亦田地の経営が彼等在家農民に請作せしめられながら彼等の地位は何ら保証されていないのである。例えば肥前国佐嘉御領小地頭等言上扶の「於田畠在家者、小地頭（名主）進退領掌せしなる記事も示している様に名主が所謂下地進止權を掌握しその処分についてはすべての權限をもつていた。従つて在家農民が名主の田地について名主ととり結ぶ関係は後世の小作的形態でなく小作者たる在家農民は名主に對し何らの主体的地位を持たずむしろ名主側が自己の支配する奴隸的生産者として田地に結びつけた搾取形態にすぎない。

次に畠地の收取関係と畠地に関して名主と在家農民のとり結ぶ関係をみると畠地は遠隔地荘園ではその支配体制が概して律令体制を継承するという色彩が濃厚で畠地は田地と異つて丈量されないのが一般的で荘園領主や國衙は畠地生産物の一部たる桑（絹）苧等を在家を徴収の單位として田率雜物又は在家役として收取するにすぎな

かつた。例えは寛永二年（一三四四）肥後國人吉庄に於ける檢注をみると田地のみ地積別に檢注し畠地部分については地積を丈量しないで桑苧等の數量のみを確定するという方法をとっている。従つて辺境地莊園の場合莊園領主は畠地を丈量せず又収取源として余り重要視してゐなかつたから畠地への莊園領主権力の浸透は田地と異つて極めて微弱であり地主たる名主の私的所有地たる性格が一層濃厚である。畠にも門畠として名主の完全なる私有地が存在し直接經營も行われていたがここで重要な事は大部分が菌の農民の生活資料獲得労働力の再生産の場として給附されている事である。これらの畠地園地についてその土地所有権（進止権）は勿論名主の掌握する所であるが菌の耕地はその住民の私的用途關係が事實上田地についてよりはるかに固定したものであるとして成立してゐたと考えられる。即ち菌の住民はこの種の畠地によつて自己の再生産に必要な生活資料の主要部分をまかなひ極めて不安定且つ不完全なものにせよここに自己の生活の足場を保持しているのである。それ故彼等在家農民は少くとも菌の畠地については自己の經營を充實せんとする要求をもちこの意味では自己の主人たる名主との対立的關係を萌芽的にせよ明確にし始めているのである。

經營形態についてみても特徴がみられる。

平安後期十一、十二世紀に於ける辺境名に於ける經營形態を直接に知り得る史料は乏しいが十三世紀に入つた鎌倉期の史料から知り得る辺境名の特質は名内に既出の「在家」「菌」「屋敷」等といわれる名主の隸屬農民と思われるもの（「在家」なる名称は全国的にみられるがこれに對し「菌」「屋敷」は九州に於て一般的である。「菌」「屋敷」等は他の地域では殆どみられない。九州では「菌」と「在家」は同義に使用されている）が多数存在する事でこれら「在家」「菌」等の農民は畠地部分に屋敷地、園地を給与されて家族をもち独立の家を構成して名の田地の一部を請作するという形式をとっている。かようにして辺境名の經營が在家農民の分割請作の形をとっているがこの部分は一部分であつて大部分は名主の直接經營の部分であつた。例えは承元二年（一一二〇）八の肥前國の在地領主石志氏の所領石志村の田地三十町七反は作人名を記載するもの七町七反余、作人名の記載なき部分二十三町余に区分される。田地に對する畠地は三十七町の菌に分割されてゐるが田地七町七反の作人はこの三十七町中二十五町となつてゐる。残りの田地二十三町余が如何なる經營形態をとつたか不明だが多分この部分に於て名主の直接經營の存在を予想してもよいのではなからうか。この様に辺境に於ける田地の經營が名主に隸屬

する「在家」とよばれる農民に分割耕作せしめられ乍ら在家農民の地位が何ら耕作権的なものを保証されて居らず土着奴隸的に分割耕作せしめられている半奴隸的なものであった。この様な傾向は辺境に於ては鎌倉中期に至る迄一般的であつたらしく関東地方の例では上野国新田庄の在家は十五世紀中葉に至るまで田地と切り離されて財産視され売買譲渡の対象とされ更に東北地方の場合には十四世紀に入つても所領譲渡の際田地と在家とは別個に切離して別人に譲る事が行われているのである。

ではこの様な在家農民とは如何にして形成されたのであろうか。その一つは相良文書の建長元年（一二四九）七月十三日の関東下知状中の「爲頼重（相良氏の一族）之計 居置百姓令耕作」とか「母尼（相良氏の一族）廿余年耕作来畠令居置年来之下人」なる記事が示している様に年来の下人を所領の土地に居置いたという様な家内奴隸を土着させるという形態であつたであろう。しかし乍ら在家の成立の経路は初期荘園の荘民が荘園領主の奴婢の土着化ばかりでなく周辺の公領の自由民的な班田農民の誘い込み、浮浪民の流入、土着等々の如き多様な形態をとつていたと同様複雑であつたであらう。在家農民の名田地に対する請作地面積がかなりの差異をもつ場合はその成立の経路が様々であつた事を暗示しているし又

関東や東北の各地に度々みられる様に在家一戸につき田一町が均等的に結合されている場合はそれが開発に際して耕地、宅地、住居を結合した分割地として均等的に開発の際の労働力となつた農民に貸与されたものである事を示すであらう。従つて在家農民は班田農民の分解の結果一旦完全に土地から遊離し家族的結合を失つて奴婢化した後再び土着奴婢化し家族を構成して農奴化して行くものとのみみる事は適當でない。辺境に於ける共同体的諸関係の解体の特質はむしろ自由民的な班田農民の畿内地域にみられる様な百姓治田主、田堵名主とそれらの家内奴隸への分解が一層緩慢で家族形態を維持したまま大規模な名主の私的隷属を保護下に流入した場合が多かつたとみられるのである。要するに辺境の名はその内部に以上の様にして成立した半奴隸的な在家農民を包含しそれらの提供する徭役及び家内奴隸労働力による名主の直営地と在家の請作経営とこの二つの経営が不可分に相補いあい乍ら一箇の完結的な再生産単位として存在したという事が出来る。畿内に於ては百姓治田主、田堵名主層として自己を確立し得た階層が辺境地域では殆どこの様に在家としてそれ自身奴隸的存在としてしか展開し得なかつたのである。

辺境の名主はかような在家農民の支配と収奪と如何に

したか。班田農民の分解に伴って發生する没落農民を家内奴隸として多數吸収する事によって名田の規模を拡大した在地領主は名主並にとつてはそれらの家内奴隸が土着し如何に自立的经营をもち始めたとはいへそれは本来自己の所有する奴隸として恣意的な収奪の対象とみなす事は当然かも知れない。しかし在家の特質は最早それが完全な家内奴隸や屋敷のみを給与された奴隸ではなく少くとも畠地については固定的な利益関係を形成し自立的な経営を開始した段階にあるものである。在家の内には本来の家内奴隸以外に新たに隷屬化した小農民も含まれているにらうからかかるものに対する支配と収奪は摩滅なしに實現されるはずなのである。ここに名内の荒蕪地の存在が重要な意義をもつてくる。即ち在地領主は在家支配を實現する為にこれを利用したのである。莊園領主の地位が高く権力の強い畿内に於ては耕地片の聚合としての名に於て高野山文書嘉元四年(一一三〇大)九月七日の關東下知杯中の「惣主荒野山河被沢者可任領」なる記事が示す様に山林原野は莊園領主の直接支配する所であつたがこれに対して辺境では山野が多く名に結合され名主の支配下におかれていた。この事は名主の農業生産及び農民支配を決定的に優位におく条件であつた。即ち辺境に於ける山林原野は名に結合され名主の直接的な

進止權に屬している事は名主自身が農業生産にとつて不可欠の肥料給源、用水源を全面的に支配していた事を意味している。永仁五年(一一九七)筑後三瀬庄の在地領主沙彌そうしんの処分状は「さんやのくさきの事なまきをきりたらんにおいてはせいしをくわうるてうそのいはれあるへきかかたきへ枯木か?」ならぬくさとうのことにいたてはきんせいにおよふへからざる也」といつているがここでは山野の支配權は在地領主の手に帰着し箇の住民に対しては僅かに枯木及び草の採取が恩惠的に許容されているにすぎない。曾て律令制下に於てすら森林荒蕪地河川は「公私その利を共にす」と規定されていたがここでは完全に土豪の大土地所有制の前に其有地は侵改されて了つていたのであり住民が名主に對して無抵抗ならざるを得ない根本的原因がここに存するのである。次に辺境の名主の社会的政治的性格と畿内におけるそれとを比較してみると両者の対比に於て先づ明らかな事は前述の嘉元四年の高野山文書と永仁五年筑後の三瀬庄の処分状に現われている様に畿内の田堵名主層が労働力の構成に於て家父長制的奴隸主としての側面をもち乍ら彼等自身生産手段との結合が不完全であつて耕地宅地以外については莊園領主乃至は在地領主層に半ば奴隸的な隷屬を強いられて来たのに對して辺境の名主は自ら山と

水をも支配しその独立的地位は高く家内奴隸と共に多数の家族、住居をもつ半独立的な直接生産者を奴隸制的に支配しているのである。従つてその広大な名の支配の爲には田堵名主にみられる様な古代家族的な体制のみでは不十分であつた。薩摩国伊作庄の広大な下司名が「居屋敷村一門輩居園廿六ヶ所」といわれる多数の同族一門を名内各地に配置し所謂惣領制の家族権力機構を創出し更にそれを強化する爲に下司名主は国衙の在庁官人化し公的な権力と結合する事によつて在家農民の支配を實現している。この事は畿内の田堵名主層が奴隸所有者階級の末端階層に属しながら半面ではそれ自身政治的には奴隸の如き状態を色濃くもつていたのに対し近境地の彼等は奴隸所有者としての性格をばるかに強くもつており政治的にも支配階級の末端としての性格を明確にしその土地所有、経営形態に於ても田堵名主層よりは畿内の初期荘園領主或は開発私領主に接近した存在であつた事を示すものである。しかし乍ら彼等が荘園領主と根本的に異なる側面はその所有地、経営規模が如何に雄大であり如何に多数の在家農民を駆使し得たにもせよそのままであるの田地は本来国衙領に属するものであつて官物地子の収取と合法的に免れる事は出来ず政治的獨立を保持し得ない裏にある。そこで彼等が国衙の赴任、卸庄から免

れる一つの手段は自ら「在庁官人化」し国衙権力を彼等の連合の私的権力機構に転化する事であつたがそれは必ずしも普遍的に可能であつたわけではなく又名主経営が本質的に孤立的な性格をもつものであつたから彼等の階級的連帯は極めて困難であり相互の分裂、対抗は不可避的であつた。かくして彼等にとつて自己の所領と地位を守る爲には何らかの形でより有力な上層の権力との結合を見出さねばならない。そこに近境における荘園寄進の關係が急速に展開する理由があるのである。

近境地域では畿内にはみられない大規模な土着豪族の私的大土地所有が發展しこれが農村に於ける家父長制的奴隸制の体制を様々の形で把握し地方的な権力を作り出してゐる。即ち中央貴族社会に於て地位確立が低く在京して地方に荘園を經營する条件に恵まれなかつた中流以下の貴族官人が国司、雜任国司の職につき仕國に下向したまま上着しその有利な地位を利用して広大な未墾地の開発を行い地方豪族化してくるのである。これらの階層こそはたとえば上野國に於ける新田義重が数百年歩に及ぶ新田庄の開発領主としてその所領を中央機関家に寄進した様に広大な所領支配の実権を掌握しつつ名目的な荘園寄進の主体となるものであつてささにかた名主層の如きは多くこの様な豪族層に隷屬しつつ中央との

結びつきを作り出したのである。かかる近境莊園の寄進主体となつた地方豪族と名主層との結合關係の実体は十分に明らかでない。しかし乍らこの場合先進地域に於て百姓治田を田堵名主が上部の在地領主に寄進し従属化したのとは異つて土地を媒介とする契機は一層稀薄である。十二世紀末源頼朝の挙兵に當つて上総権介玄常が動員し得た二万と稱せられる龐大な兵力や吾妻鏡がしばしば著名な豪族の御家人以外を一括して「某国御家人」等の称をもつてよんでゐるものは恐らくはこの様な土着豪族に従つてゐる名主層であつたと推定されるがその結合關係は封土の恩給關係を基調とする封建的な体制ではなく奴隸所有者の二つの階層に於ける家父長制的掣制を紐帶とした従属制度であつたと思われるのである。この事は又當時の豪族的領主層が名主層を表面いかに主従關係として組織してゐたとはいへ、その經濟的基盤はかかる名主層との間に加地子收取關係が十分展開し得ず豪族的領主自身が名主層と本質的に異らない家内奴隸及び在家農民の所有地であつて直接經營的な性格を多分にもつてゐた事からも推定される。例えば新田氏の場合についてみれば義重の所領は田二九六町余、島百町余と在家二〇八町を中心とした大なる未墾地荒野を含む新田郡一円に亘るものであつて彼はそれを諸子に分割し、各要所に一族を配

置し家父長制的な同族結合を中心とした体制をもつて在家農民の支配を実現してゐるのである。この際新田氏と在家農民との間に大規模な近境型の名主層が介在せず新田一族が在家を直接的に掌握してゐる事は注目すべき事であつて直接的な所領の經營に於ては豪族的領主といへども名主層と本質的に異らないのである。十二世紀に於けるこの様な豪族的領主の歴史的性格は勿論十世紀の畿内にみられた私営田領主や十世紀中葉の平将門の存在形態とは異つてゐる。源氏が将門に破られた時の状況が「野本……取木等ノ宅ヨリ始メテ与カノ人々ノ小宅ニ至ルマテ皆コトコトク焼キ巡ルヘ中略」又筑波、眞壁、新治三箇郡ノ伴類ノ舍宅五百余家ヲ買ノ如ク焼キ払フ」と記されて居りその勢力が専ら各地に散在する「伴類」に與力の人々等とよばれる多数の独立的な農民へ自由民的存在としてゐる基礎としてゐた事からも分る様にこの段階に於ける農村の奴隸制的階層化は十二世紀に比べればはるかに未熟であつた。これに対して十二世紀末期に於ては豪族的領主、名主、在家等の奴隸制的階級分化は顕著であつて豪族的領主層は名主層を軍事的には主従制に引き入れ始めて居り將門と異つたはるかに強力な武力を形成してゐるのである。

近境地では畿内と異り農村内部に於ける奴隸制的階級

分化は遅れていたが中央貴族社寺等の直接的な権力の作用が稀薄であつたから名田の規模は極めて確大に展開し、大なる未墾地と共に零落した旧自由民も名の体制内部に在家農民としてとり入れられた。この結果畿内の田庄名主層がそれ自身奴隸的側面を強くもつていたのに対し、辺境の名主は畿内に於ける荘園領主或は在地領主的性格を兼ねもつという側面さえ否定出来ず、彼等の国家権力に対する敵対的な力を形成した。しかもこれに加えて、辺境に於ては中央貴族の土着豪族化せるものが繁栄し、彼等は本質的にも名主層と異らない所領経営を行つていたが、半面中央との縁故を利用して所領を中央権門に寄進し、その権威を背景とし、一つ名主層を自己の庇護下におく事によつて強力な軍事力を形成し、国衙の支配機構を麻痺変質させて十二世紀末の内乱への実力を養成していたのである。

以上によつて私は、辺境地・荘園の名体制と荘園内に於ける階級関係について概観してきたのであるが、時間的な制約の爲非常に不十分なものとなつたが、若しこれを説まれる諸先生、諸先輩又は同輩諸兄弟姉の中でお気づきの点があれば御高見を賜りたいと思つてゐる。

参考文献並に論文

永原慶二 「日本封建社会論」

永原慶二

「在家の歴史的性情とその進化について」

（日本封建制成立の研究所収）

井上光良

「律令国家の基盤とその動搖」

竹内理三

「貴族的政治の経済的基盤」

（以上二論文新日本史大系 卷二

「古代社会」所収）

佐藤進一

「封建制の下部構造」

（新日本史大系 卷三「中世社会」所収）

その他

石母田正
松島栄一

日本史概説1（岩波新書）等



結びつきを作り出したのである。かゝる近境莊園の寄進

置し家父長制的な同族結合を中心とした体制をひいて正

本号へ投稿された方々の御紹介

中西京二君

四年生、四期生、この春御卒業です。いろいろと会の事に盡してくださいました。心からお礼をのべます。

高木美志様

卒業生、現在志摩郡南島町島津小学校に勤めていられます。おいそがしいかたわら会を通しての研究に努力されています。

田上 洋君

一年生、七期生、運動部（学芸学部軟式庭球部長）にも入って活躍してみえます。日本史専攻です。

渡辺武雄君

三年生、五期生、柔道三段の腕前で不勉強なものはないとばすとの事です。御注意下さい。

大仏佳二君

一年生、七期生、生徒会の執行委員として活躍され社会科学に卓見をもってみえます。

小玉道明君

一年生、ヒ期生、東洋史を専攻され研究会にも新しい分野を開いて下さるでしょう。

稻葉 稔君

三年生、五期生、研究会の理事としていろいろお世話していただいています。

田中 晋君

三年生、五期生、蕃政史料蒐集等に努力され、特に近世史に卓見を持ってみえます。